

---

# ギャルゲーの一部分っぼいの（テスト小説）

イチシキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギャルゲーの一部分っばいの（テスト小説）

### 【Nコード】

N4145U

### 【作者名】

イチシキ

### 【あらすじ】

まあ、よくあるギャルゲーの一部分っばいものです。

転校してきた高校二年生の男子が、同じ高校に通う一年生の女子に出会うだけ。

ここから恋が発展したりしなかったり、みたいな。

なんとなく。

本当になんとかなく、横道に入っていた。

駅までの通学路からは少し外れるが、時間的にはあまり変化はない。

むしろ地図で見た感じ、ショートカットできると言える。

「転校初日から何してんだろなー」

とか呟きつつ歩いていると、

「…ん？」

女の子がいる。

何かの店の軒先で腕を組んで片手はあごに、目をつむってなにやら  
思案しているように見える。

「何やってんだ……あの娘……？」

少し近づいてみたところ、その店は小さな駄菓子屋であることが分かった。

まったくもってそれっぽいお婆さんが座布団に座り、店番をしている。

外装も内装もソーとレトロだ。保証書叩き付けたいほどの天然記念物な駄菓子屋だ。

「……………」

真横に立っても女の子は微動だにしない。さつきからずっと同じポーズのままで固まったままだ。

もしかするとよく出来た人形なんだろうか、と思ったがそもそもこんな所に立てる意味がない。

この狭い横道では進路妨害でしかありえないからだ。

ま、とりあえず声をかけてみることにした。

「あの……」

「っひゃあうう！？」

普通に声をかけただけだったのに、女の子は電流でも流されたかのようにはね上がった、目を白黒させる。よほど驚いたようだ。

「あー…その、すまん。驚かせるつもりはなかったっーか…なんと  
いうか…」

とっさに弁明のような言葉が口をついて出る。

女の子は目尻に涙まで浮かべて鼓動を押さえるようにしながらも、  
しっかりと首を横に振った。

「い、いえ…突然のことで心臓止まりそうになっただけです。大事、  
ないです」

ふうー、と長い吐息。そして恥ずかしげにえへへ、と笑う。

つられてこっちも微妙な笑みを浮かべる。

にににににににににに。

そんな風に少し笑い合っていたら、女の子が口を開いた。

「あの……もしかして、先輩さんですか？」

「ん？ってことは君は一年生か？」

そーいやうちの学校は学年によって胸元のリボンの色が違うのかなとか。

この女の子のリボンの色は青、つまり我が校の一年生というわけだ。

ちなみに、なぜか男子はそういった物が無い。

男女差別のような気がするが、その辺は大人の事情だろう。

女の子は再度微笑むと、ぴしりと敬礼もどき。

「1年E組の、風丘<sup>かざおか</sup> 翠<sup>みどり</sup>です。以後、どうかよろしくお願いしますです」

「俺は2年B組の、皆川<sup>みながわ</sup> 総慈<sup>そうじ</sup>。ま、よろしくな」

自己紹介が済み、互いのことが分かったところで、ひとつ聞きたいことがある。

「ところで、さっきから何を考えていたんだ？声かけるまで気付かないなんてハンパじゃないと思うが」

「えう、それはですね……」

ちらつ、と駄菓子屋の中に目を見やる風丘。俺もつられてそちらを見る。

そこには飴玉やスナック、するめイカなどといった、どれもこれも数十円という今時驚きの安さの素朴な駄菓子が沢山ある。

うむ、まごうことなき駄菓子だ。駄菓子だけれども……

「で？」

「あ、はい。その、それなんですけど……」

風丘がそれ、といって指したものは、

「うめえ棒、か？」

「はい……おやつとして買って帰ろうと思ったところまでは良かった

んですけど、何味にしようかなと悩み続けるともう止まらなくて…」

ちなみに、うめえ棒とは、1本10円の典型的なスナック菓子で食べるとしゃくしゃく、というかサクサク、というかそんな感じな食感が売りの一品の駄菓子のことである。

色々な味があり、今風丘が手に取っている「たらこ味」「めんたい味」「ソース味」もそのひとつである。

「（しっかし…微妙なチョイスだな……）」

風丘はその3つを真剣な瞳で上下左右と観察しつつ、悩んでいる

「むむ…これは私の人生においての9つ目の試練なのでしょうか……」

…まあ、色々とツツコミを入れたいが、それは置いといて、

「みつつ買えばいいじゃん」



アホらし……と思いつつも、それが極力顔に出ないように言っていた。

しかし、風丘はそれを聞いてびっくり、と体を震わせた。

こちらをまん丸な瞳で見つめて、三本のうめえ棒を見つめて、しばし黙考して。

「そ、そんな手が……」

「……………」

俺、今どんな顔してんだろ……

風丘はそんな状態の俺に構わず、名案を実行に移して会計を済ましていた。

そして、くるりと振り向くと、熱っばく上気した顔で俺の手を取り、ぶんぶんと上下に振る。

その感動ここに極まれり、といった表情と行動に俺はドキリとさせられる。

「ありがとうございます、ありがとうございます！ センパイの助けが無かったら私、ここで死ぬまで悩み続けて悩み続けてひからびてするめの一本になってどこかの誰かさんにおいしく食べられてしま

うところだったかもしれないですよ!」

…ただ、頭の中身は少々のぞいてみたい気がする。

ま、礼を言われて悪い気はしない。

「まあ、気にするな。困ったときはお互い様ってことで」

「はあ……センパイって情深いですねえ……………」

今度は心底感心した風に、しみじみと言う。

その前にそろそろ手を離して欲しい。はっきり言って照れくさい。

祈りが届いたのか、風丘は俺の手を離して、自身の両手をぱん、と打ち付けた。

そして鞆の中から何かを取り出した。

「はい、これはお礼の気持ちです」

「え?けど、それは……………」

うめえ棒のソース味。さっき買った奴の一本。

「……いいのか？」

「はい。ですからお礼です。受け取ってもらえないと私が納得できないんです」

うめえ棒を受け取る。

「ありがとな、風丘」

「いえいえ。あ、あとそれから私のことは、できれば翠と呼んで下さい」

「ああ。…それじゃ帰るかなつと、翠」

「はい」

につこりと笑って付いて来る。家は駅の近くらしいので、交差点まで一緒になった。

「じゃ、またな、翠」

「はい、センパイも！」

さようならあゝ、の聲が徐々に小さくなる。

翠は俺の姿が見えなくなるまで手を振って、後ろ向きに歩いていた。

……転ぶなよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4145u/>

---

ギャルゲーの一部分っぽいの（テスト小説）

2011年10月9日07時40分発行